

度や意欲などを育むことが重要である。

## 新学習指導要領を踏まえた評価観点の設定

新学習指導要領の実施に伴

い、学習評価も新しい四つの観点、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」が設定された。これは、各教科の内容に即して思考・判断したことに伴って、その内容を言語活動を中心とする表現に

係る活動と一体的に評価する観点として「思考・判断・表現」を設定したものである。

※知識基盤社会  
平成17(2005)年に中央教育審議会が「21世紀は知識基盤社会の時代」と述べた。「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」であると言われており、特質としては、知識には国境がなくグローバル化が一層進む、知識は日進月歩であり競争と技術革新が絶え間なく生まれるなどが挙げられている。

## 「生きる力」の概念図

新学習指導要領の理念である「生きる力」は知・徳・体のバランスのとれた力を指す

### 確かな学力

基礎・基本を確実に身に付け、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力

## 生きる力

### 豊かな人間性

自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など

### 健康・体力

たくましく生きるための健康や体力

## 小学校の学習指導要領改訂のポイント

「生きる力」を育むという理念の継承

### 【改訂の基本的考え方】

\*教育基本法改正等で明確になった教育理念を踏まえ、「生きる力」を育成する

知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視する

道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成する

授業時数を増加

国語、社会、算数、理科、体育の授業時数を10%程度増加  
週当たりのコマ数を低学年で週2コマ、中・高学年で週1コマ増加

教育内容の見直し

### 教育内容の主な改善事項

- 言語活動の充実
- 理数教育の充実
- 伝統や文化に関する教育の充実
- 道徳教育の充実
- 体験活動の充実
- 外国語教育の充実
- 社会の進展に対応した教育

### ※教育基本法改正

平成18(2006)年12月15日成立、22日公布・施行。約60年ぶりに改正された。「人格の完成」や「個人の尊厳」など、これまでの教育基本法に掲げられてきた普遍的な理念は大切にしつつ、新しい時代の教育の基本理念を明示。





今年4月から全面实施された小学校の新学習指導要領は、21世紀の知識基盤社会において「確かな学力」「豊かな人間性」「健康・体力」から成る「生きる力」の育成に主眼を置いている。これからの教育は「ゆとり」でも「詰め込み」でもなく、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力の育成が重要とされる。

### 新学習指導要領の理念

平成20(2008)年1月の中央教育審議会答申では、「知識基盤社会」の時代といわれる社会の構造的な変化の中で、「生きる力」を育むという理念はますます重要になってきているとして、前回に引き続き「生きる力」の育成を理念としている。

ここでいう「生きる力」と



は基礎・基本を確実に身に付け、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力である「確かな学力」、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの「豊かな人間性」、たくましく生きるための健康や体力である「健康・体力」の三つから成るものであり、これらを調和的に育むことが重要である。

### 教育内容の主な改善事項

第一に言語活動の充実。国語をはじめ各教科などで記録、説明、批評、論述、討論などの学習を充実する。

第二に理数教育の充実。国際の通用性や内容の系統性の観点から、算数で台形の面積などの指導内容を改善したり、



反復による指導や観察・実験を増やしたりする。

第三に伝統や文化に関する教育の充実。国語でのことわざ、社会での歴史教育、算数でのそろばん、音楽での和楽器、総合的な学習の時間での例示としての地域の伝統や文化に関する学習などが挙げられる。さらに道徳教育や体験活動、外国語教育の充実も図る。

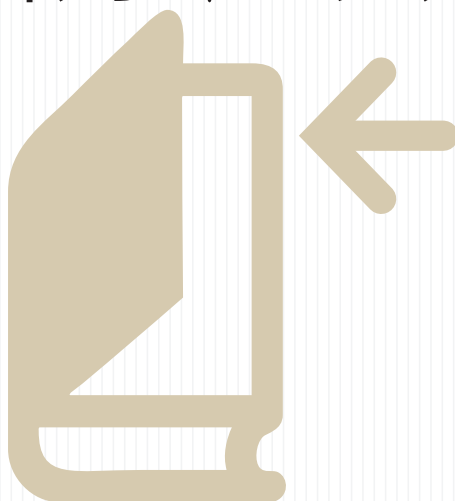
### 「習得・活用・探究」という学習活動の種類

教科では「習得・活用」によって基礎的・基本的な知識と技能を確実に習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力などを育成する。また、総合的な学習の時間を中心とした「探究」によって主体的に学習に取り組む態

## 教育最前線

## 新学習指導要領がスタート

# 知識や技能の習得とともに 思考力・判断力・表現力の 育成を重視



さとう しん  
**佐藤真**

授業実践リーダーコース教授

# 出題を工夫し 子どもの 「なぜ？」を 引き出す



もり やす き  
森泰樹  
附属小学校教諭



**新** 学習指導要領の算数科の目標に「筋道を立てて考え、表現する能力を育てる」とある。「筋道立てて考えること」は以前から大切にされてきたことだが、「表現する能力を育むこと」が強調されたことが今回の改訂の大きな特徴である。私なりにこのねらいを解釈すると、「表現するときには必ず思考は伴う。だから、表現することを目標に位置付け、それを評価することを繰り返していけば、結果的に思考力も育むことにつながっている」となる。

附属小学校算数部では以前から、算数における子どもたちの表現を「算数的な表現」として位置付けてきた。算数的な表現とは「操作的・図的・言語的・記号的」な表現である。このたびの改訂を受け、今まで以上に表現する能力を育むことを重視し、具体を示していくことが求められる。下記は昨年度の研究大会で提案した内容の一部である。

## 1 子どもと教材とのかかわりを重視する

教員が提示する「課題」が、子どもの「問い」となるように課題の出合わせ方を工夫する。例えば、割り算の授業で「あめが袋に□個入っています。3個ずつ分けました。何人に分けられるでしょう」と、□を使った問題を提示した時、子どもたちはどんな反応をするだろうか。おそらく、子どもたちからは「もし～なら」「でも、それだったら～」などの気づきの言葉が出てくるだろう。このように出会いを演出することで、子どもの「なぜ？」を引き出し、自分の考えを表現するきっかけとなると考える。そのほかにも次のことを意識して実践を積み重ねている。

- ◆子どもの数量感覚を刺激する…「何かありそうだ」「あれとあれは似ている」などの感覚
- ◆子どもの声を引き出す…「あっ」「あれっ」などの驚き、「なぜ？」という疑問の声
- ◆子どもの算数観を変える…答えは一つ、答えを求めさえすればいいという見方を変える

## 2 子どものたどたどしい表現を認める

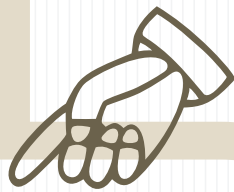
一生懸命説明をしているけれど、なかなか相手に伝わらないことがある。伝わらないことは、解決の過程なので、むしろ自然なことだと考えられる。だから、そのことを認識し、大きな構えで子どもたちの表現を受容し、聞くことが大切である。その姿勢が子どもたちに安心感を与え、自然な発想を表出させることにつながると考える。

**新** 学習指導要領では言語活動の充実が唱えられている。道徳教育では、主としてコミュニケーション能力や思考力、判断力、さらには感性・情緒の基盤となる言語力の育成に力を注がなければならない。道徳の授業は、資料からじっくりと主人公の心の変容を読み取り、それについてクラスで話し合い、自分の考えを書き留めたりすることが多い。すなわち、言語力の育成に役立つ活動が多いといえる。では、具体的にどうすれば子どもたちの言語力の育成を促進できるだろうか。いくつかの観点の中から「話し合い活動の充実」に絞って論じてみたい。

「話し合い」や「討論」を仕組んでいくうえで最も重要なのは、課題解決的学習にすることである。話し合い活動が活発で、とても意欲的に学習に取り組んでいる研究授業に出合うことがある。しかし、よく観察してみると、一見話し合っているようだが、まったく相手の話を聞かず、自分の意見や考えを話すことに終始してしまっている場合が多い。それは、子どもたちの意識の中に課題解決的な思考がなかったり、互いに合意・了解しようとする思考がなかったりするからだ。そこで提案したいのが「合意形成型道徳学習」である。

具体的には、道徳的葛藤を扱った資料を用意し、主人公の悩みの訳について考えさせ、「主人公はどうすべきか」について話し合う。その際、「クラス全員全員の合意・了解を求める」ことが大切である。みんなが合意・了解してつくり上げた規範や価値は、日常生活でも生きてくるものと考えられる。なぜならば、全員で納得できる課題解決の方法とその根拠について話し合ったのだから、それに従うのは当然のことである。これは、いわゆる道徳的実践力と道徳的実践の融合にもつながると考えるがいかがだろうか。





## 厚くなった 教科書から見える 知識基盤社会に 向けた学習指導

今春の新学習指導要領の実施に合わせて教科書がずいぶん厚くなった。新学習指導要領の改訂点を一言で表せば「知識基盤社会を生き抜いていく子どもを育てること」に尽きるのではないだろうか。そのために今回の改訂では基礎的・基本的な知識・技能の習得が重視されたと理解している。知識量が減ったことの反動で内容が増やされ、教科書が厚くなったわけではない。知識基盤社会を生き抜いていくために、習得した知識が社会との接点を持ちつつ、社会そのものをつくり出していく学びが求められているのである。

「オーセンティック」という言葉がある。一昔前は「アセスメント」という言葉と結び付いて「オーセンティック・アセスメント(真正の評価)」として使われてきた。これは標準テストへの批判を背景として広まったものだが、現実生活においては、特定の問題の解決のためには特定の文脈の中で自分の知力や知識・技能が試されるとする立場に立つ評価である。最近では、オーセンティックが「ラーニング」と結び付いて使われることもある。やはり現実生活の文脈の中で、状況論を援用しつつ学習活動を展開させていこうとする試みである。「オーセンティック・ラーニング(真正の学習)」の研究は緒に就いたばかり。昨年度、教職大学院授業実践リーダーコースの学生が、日本では数少ない実践研究者の一人として名乗りを挙げた。

教科書が厚くなり、知識量が増えた今だからこそ、新学習指導要領がめざす知識基盤社会に向けた学習指導の在り方が問われている。その一つの可能性として、オーセンティック・ラーニングは注目されていくと思われる。



まつもと しんじ  
**松本伸示**

授業実践リーダーコース教授

教育最前線

# 新学習指導要領で ココが変わる

Yodozawa Katsuji

Matsumoto Shinji

## 言語活動の 一環として 「合意形成型 道徳学習」を



よどざわ かつじ  
**淀澤勝治**

心の教育実践コース准教授